

メデイア人脈を考察する

—— 戦中・戦後の三つの「事件」から

飯田 いいた 和郎 かずお
(一般社団法人アジア調査会理事)

第3章 日中国交正常化の扉を開く

第1節 冷戦、そして時代の潮流

この章では政治家、大平正芳²⁰とジャーナリスト、田中香苗がそれぞれ異なるフィールドに立ちながら、日本と中国による国交正常化という同じ目標に向かった歩みをたどりたい。2人は多くの共通点を持っていた。田中は大平と個人同士の緊密な連携を続け、大平も田中を頼り、その意見に耳を傾けた。2人は互いを尊重し合った。

国交正常化を成し遂げた首相、田中角栄²¹の任のもと、実務のすべてを負ったのは、外相だった大平正芳である。一方、田中香苗は自らの媒体を通じ、国交正常化の必要性を訴え続けた。世論を形成・導くその手法は、盟友・大平への応援でもあった。ここでも母校・東亜同文書院に源を發する中国についての田中の知識や経験が影の力になったと考えられる。

まず当時の時代背景を確認したい。第2章の主題だった文化大革命が収束の気配を見せ始めた1970年代初頭、



【図17】大平正芳（左）と田中香苗＝『回顧 田中香苗』より

世界情勢に大きな変化が現れていた。

文化大革命発動の背景にあるように、中国は路線論争からソビエト連邦と激しく対立、その一方で1971年10月、国連加盟を果たしていた。²²⁵翌72年2月には米大統領、ニクソンが長く関係を遮断していた中国を電撃訪問し、毛沢東らと会談した。このように列挙すると、国際社会の目はやはり中国に注がれ、国際政治の舞台においても主役は中国だったと言つてよいだろう。

ニクソンの中国接近は①ソ連の軍事的脅威への対抗②泥沼化していたベトナム戦争の終結——を指す動きだった。

中国も外交政策の転換を迫られていた。中国側から見てもよい。1969年3月、中国東北部・黒竜江省の中ソ国境を流れるウスリー川の中州にある珍宝島（ロシア名・ダマンスキー島）で軍事衝突が発生。かつての「社会主義の兄弟国」間の緊張は日々、その度合いを増していた。

中国指導部は、米ソ二つの超大国と同時に、ことを構えるのは当時の国力では大きな無理があるとの分析に傾く。下した判断は、国境を接するソ連を主たる敵とし、一方では米国との関係を改善。ソ連の脅威を軽減させるというものだった。「敵の敵は味方」。ソ連という共通の敵を念頭に、太平洋をはさんだ両国の思惑が一致した「米中接近」はあの意味、当然の成り行きだったといえるだろう。



【図18】1972年9月29日
『毎日新聞』夕刊1面

中国は次に日本を視野に入れる。「米中関係を固める上でも、米国と政治、経済的に緊密な関係にある日本との国交が必要だった。それに加え、日本との良好な関係の下で、中国の経済建設に必要な資金と技術を得ることができると考えられた」²²⁶。対日外交は対米外交の延長線上にあったのだ。

国際情勢の急展開を前に、一方のプレーヤー、日本も座視してはられない。当時、日本は米国などとともに、中華民国と国交を維持していた。国民党が政権を担う中華民国は、第二次世界大戦の戦勝国の一つであり、1945年の国連創設と同時に加盟していた。ただ、国民党との内戦

に勝利した共産党は1949年10月に、北京を首都に中華人民共和国成立を成立させた。台湾に逃れていた国民党政府は「大陸反攻」²²⁶を唱えるものの、国際社会は現実にはあり得ないと冷めた見方がほとんどだった。

日本は1972年9月、田中角栄、大平正芳らが訪中し、困難な交渉の末、中国とともに「日中共同宣言」²²⁷を発表、不正常な関係を正した。田中内閣が発足してわずか2カ月後のことである。

敗戦からすでに27年が経過していた。東亜同文書院同窓生にとっても、敗戦による母校の消滅から同じだけの歳月が流れていた。閉校される前の最後の卒業生・在校生にしても、壮年期に差し掛かる年齢にあった。東亜同文書院OBジャーナリストにとって、彼らが情熱を注いだ中国との国交正常化という一大取材テーマはある意味、記者生活の総決算ではなかっただろうか。まずは田中香苗の視点から検証してみたい。

第2節 大平正芳と田中香苗 2人の接点

東京・港区白金台。森田²²⁸は静かな住宅街の一角にある自宅に、笑顔で論者を迎えてくれた。大平正芳と田中香苗。第3章を構成する上で中心となる2人の関係を、間近で見えてきた数少ない存命者が、1934（昭和9）年生まれの森田である。森田へのインタビューは約1年の間隔をおい



【図19】 森田一 = 論者撮影

て二度行つた。大蔵官僚、やがて大平の家族となり、大平の秘書、後継として衆院議員8期、その間、閣僚を務めただけあつて記憶は今日も鮮明である。

「コウビヨウさんとは本当に仲がよかつた。大平とはウマが合つたんでしょ。しょっちゅう来ていましたよ。大平もコウビヨウさんが来ると嬉しそうでしたね」²³⁰

森田一は、田中の名前「香苗」を音読みして懐かしそうに回顧する。大平の長女・芳子の娘婿であり、長年、大平の秘書を務めた森田は「大平の『性格の一部』と呼ばれて

いた。風呂とトイレ以外は、ずっと一緒だった」²³¹。片時も離れることなく、絶えず大平に仕え、彼の心中を読んだ。

大平正芳の傍らで森田一は日記やメモを記し続けた。「森田がこの日記をしたためるきっかけは、岳父大平から日記を書いておこうように言われたことに始まる」²³²が、「性格の一部」である森田だけが知り得る大平の行動記録ともいえる。その中に田中香苗の登場はそう多くはない。論者がその点を尋ねると、森田は「2人の仲ですからね。書き残すまでもなかつたんですよ」と、あつさり言つた。

一方、田中香苗の二女、平田早苗²³³は自宅にふらつと現れる「大平のおじさん」をよく記憶している。「大平さんの自宅（東京・世田谷区瀬田）と、我が家（大田区田園調布）が近かつたこともあつて、しょっちゅういらしていました。うちは玄関のすぐ横が応接間で、お見えになると、父とそこに籠っていました。私は、母に命じられてお酒や、おつまみを運びました。『お母さんが美人だから、早苗ちゃんも美人になつたねえ』。大平のおじさんがそう言ったのを覚えています」²³⁴

大平正芳の秘書だつた森田一は田中香苗が「しょっちゅう来ていた」と言い、その田中の娘・平田も大平が「しょっちゅう来ていた」と口をそろえる。2人は互いに行き来していた。

大平正芳と田中香苗は、いくつかの共通点を持つていた。

これらも互いを吸引し合う要因になったようだ。列举してみよう。

①明治生まれでほぼ同年代。田中香苗は1904（明治37）年10月15日生まれ、大平正芳は1910（明治43）年3月12日生まれ。

②香川県出身。

③特に裕福でない家庭に生まれ、育った。

④20代の若さで、中国で長期に滞在し中国を体験した。

⑤先見性、そして熟考型。

これら①～⑤は、2人が親交を温め、認め合うバックグラウンドとして、この第3章の中で追って検証していく。特に④はそれぞれの立場や滞在都市が異なるが、まだ知己を得ていない2人は、中国大陸に進駐した日本軍の横暴、本来は主人であるべきなのに「支配される側」の中国人という、同じ景色を見たことになる。国交正常化に向けた2人の「原点」といえ、興味深い。

このほかに、2人の接点を挙げるとすれば、それは共通の趣味だろう。神奈川県茅ヶ崎市の会員制ゴルフコース、スリーハンドレッドクラブは、湘南の丘陵地帯に広がる。入会資格審査が厳しい名門クラブとして知られ、政財界を中心に、限られたメンバーシップによる運営は「週末の社交場」と言われる。プレーを楽しみ、会員同士が親交を温めるだけではない。周囲から人を遠ざけ、18ホールを回れ

ば、さまざまな話題が上る。大平正芳も、田中香苗も大のゴルフ好きだった。2人は共にこのスリーハンドレッドクラブの会員だった。

「ある年などは土日祭日夏休み冬休みで、一年間に一〇四回プレーした」ほどの大平正芳は、田中香苗と連れ立ってコースを回る機会も多かった。田中自身「私は大平さんや角榮さんとゴルフをすることがしばしばあった」と大平との親密さを認めている。森田一の日記によると、確かに外相時代もほぼ毎週末、スリーハンドレッドクラブを中心に、首都圏一円のゴルフ場を訪れている。プレーしながら、機微に触れることも語り合ったのが想像できる。

森田一は「2人で話すのは、故郷の讃岐のことや、共通の友人のこと。中国の話もよくしていました」と証言する。1970年代初め、日本はその中国との国交正常化へ走り出していた。

四国・香川は大平正芳、田中の2人の郷里である。「県民性」と言われるものは科学的根拠に乏しいとの指摘もあるが、晴れる日が多い讃岐地方の温暖な気候は、そこに根付く人たちの性格に濃厚さをもたらしてきた、とされる。

香川県の面積は全国47都道府県別で最も狭い。歴史をたどると、瀬戸内海対岸の本州を含め、外からの敵との戦いの繰り返しでもあった。そんな歴史のせいだろうか、堅実さという、もう一つの県民性は、2021年の「都道府県

別人口1人総預貯金残高」で、全国7位（862万円）²³⁸という数字にも表れる。

自身も香川県人である森田一は、そんな讃岐人気質を「せい」と、やや自虐気味に表現する。ただ、地元の方言で「へこらい」と呼ぶ「せいざ」は堅実さの裏返しでもある。恵まれた風土ゆえに、また、歴史の教訓から起こり得る出来事への備えとして、支出を抑え、預貯金に回してきたからだろう。

讃岐人気質について、新潟県出身の田中角栄が大平正芳に言ったことがある。「新潟県人のしたたかさっていうのは雪が降るから、雪を裸足で踏まなきゃならん。その程度のもんだ。だけど、おまえのほうは四国遍路路の敷石みたいなもんだ。千年も善男善女に踏みならされてるから、おまえのほうもつとしたたかだよ」²³⁹「大平君は四国讃岐の出身だが、戦国時代から本土の軍靴に踏みにじられながら生きてきた県民性のたくましさがあった。四国の石みいたいところがね。」²⁴⁰

「へこらい」という方言からは、田中角栄の言った「したたかさか」「たくましさ」の意味合いを感じる。じつと状況を見直し、慎重に判断する。森田一が謙遜するように表現した自虐ではなく、ある意味、讃岐人の自負ではないか。それを大平正芳は政治家として、そして田中香苗はジャーナリストとしてそれぞれ持ち合わせていた。

その香川県は阿讃山脈を背に、東西に長い。愛媛県寄りの三豊郡和田村（現・観音寺市）に生まれた大平正芳に対し、田中香苗は東側、徳島県に近い旧大川郡白鳥町が故郷だ。ここも観音寺市同様、「平成の大合併」によって2003年、白鳥町ほか、引田町、大内町の三つの町が一つになって東かがわ市に生まれ変わった。

空気を運ぶような2両編成のディーゼルカーを、JR高徳線の無人駅、讃岐白鳥駅で降りる。人通りはなく、たまに見かける人もお年寄りばかりだ。過疎化・高齢化はここも例外ではないが、20分ほど歩くと、周囲の景色と不釣り合いとも思える大規模施設が見えてくる。東かがわ市温水プールで、既存の市営温水プールの老朽化に伴い、24年7月に完成した。

その温水プール施設入り口に、田中香苗の胸像が白御影石の台座の上に建つ。ここは田中が通った旧白鳥小学校正門前に位置する。登下校した児童たちを見守っていたのだろう。田中にゆかりのある地元の有志たちが「田中香苗先生顕彰会」を組織し、彼の一周忌にあたる1986年10月に建てた。

その白鳥小学校はというと、2020年4月に市内初の小・中一貫校、白鳥小・中学校としてここから約500メートル東へ移転・開校した。やはり地域の児童数の減少のためで、それまで3校あった小学校を統合した。それでも1学年（小



【図20】 田中香苗の胸像＝論者撮影

学1年) から9学年(中学3年)まで、各学年とも2クラスという小規模校である。²⁴²

白鳥コミュニティ協議会事務局の六車周二によると、小学校の移転・温水プール新設に伴って旧白鳥小の記念碑などの多くは処分・移転した。だが、田中香苗の胸像は以前からの場所にそのまま残した。六車は「胸像設置の経緯はかなり昔の話でわからないが、私も含め白鳥小の卒業生はみな、田中香苗さんのことは知っている。立派な先輩から学ぼう、と。だから、撤去の話は出なかった」と語ってい

る。²⁴³ 田中の母校は、場所も形も変えたが、胸像となった田中は旧白鳥小跡にとどまる。

大平正芳は農家の三男に生まれた。「米麦を主とする当時の農家の家計は、楽ではなかった。私のうちは、子供が六人(男三人女三人)もいたのでなおさらだった。和足はもの心ついてから、洩で袖がピカピカ光っている着物を着て、稲藁でつくったぞうりをはき、一汁一菜に麦飯(もちろん米が三、四分入っていた)を食べて育った。海浜近くに住みながら、鮮魚にありつくのは祝祭の日くらいで、たまに食膳で見かけるものは、鯛や鯖の干物であった²⁴⁴」。その大平に対し、郵便局員の次男として誕生した田中香苗の故郷は「貧しいが平和な村だった白鳥である。(略)農繁期には子供たちは百姓仕事を手伝って授業を休むことも平気だった²⁴⁵」。2人とも、豊かといえるほどではない、当時としてはごく普通の環境に生まれ、育ったようだ。

田中香苗は白鳥小高等科から、一度は大阪に出て繊維問屋に勤めたが、やがて帰郷。地元の旧制中学に編入した。そこで恩師から進学先に東亜同文書院を勧められ、合格した。1924(大正13)年入学。だが入学直後の一時期、郷里・白鳥町に戻っている。自伝には「体調を壊したので上海から一ヶ月程して白鳥に帰って来た²⁴⁶」とあるが、二人の平田早苗は「本当は違うようですよ。母はいつも言っていました。『故郷が恋しくなったホームシック』だって²⁴⁷」。



飯田 和郎（いいた・かずお）氏

1960年生まれ。関西学院大学経済学部卒業後、1983年毎日新聞社入社。佐賀支局、西部本社報道部を経て91年に東京本社外信部。北京特派員、台北支局長、中国総局長（北京）、外信部長など。2013年RKB毎日放送（本社・福岡市）に移り、報道制作センター長、専務取締役などを務めたのち23年に退職。在職中から福岡市の西南学院大学院国際文化研究科修士課程に通い、本稿を修士論文として提出（『アジア時報』用に改題）、24年3月修了した。一般社団法人アジア調査会理事。

このため、東亜同文書院の卒業は1年間、遅れた。故郷を離れた先が異国だったとはいえ、田中の郷土愛は並大抵ではなかったことの証左かもしれない。

田中香苗が中心になって設立したアジア調査会で、秘書として田中に仕えた海藤ユキ子は、田中が香川県出身者との付き合いをとっても大切にしていたことを記憶している。²²⁰田中が愛した郷土から政界の頂点へと上り詰めた政治家が大平正芳だった。2人はいつ、どこで知り合ったのか。森田一も「それは覚えていない」と語る。だが、のちに毎日新聞社の主な役職を退いた直

後の田中を、「東京香川県人会は南原繁²²¹、大平正芳などという人が早速拉致し去って行き」、同県人会長に据えられたというのだから、故郷を接点に、2人はある意味、自然な形で結びついたと考えるべきだろう。

221 1910-80年、香川県生まれ。大蔵省に入り、池田勇人蔵相の秘書官

から政界へ転じた。衆院議員当選11回。第1次池田内閣の官房長官。池田から旧池田派「宏池会」を引き継ぐ。田中内閣で外相、蔵相、三木内閣で蔵相を務め、1978年首相に就任。首相在任中の80年6月、選挙運動中に急死した。

222 1918-93年、新潟県生まれ。47年に衆議院議員に初当選。72年首相に就任し、日中国交正常化を実現した。また、「日本列島改造論」を提唱したが、地価高騰や狂乱物価を招き破綻。74年首相を辞職後、ロッキード事件で逮捕された。

223 1971年10月、中華人民共和国を唯一の合法的な中国政府として承認するアルバニアによる動議が国連総会決議2758（通称「アルバニア決議」）として採択され、中国の国連加盟が決まった。

224 Richard Milhous Nixon 1913-94年。米国の第37代大統領（在任1969-74年）。共和党選出。米中接近やベトナム戦争休戦を実現させた。ニクソン再選を策するグループが、ワシントンのウォーターゲートビル内の民主党全国委員会本部に侵入し、盗聴装置を仕掛けようとしたウォーターゲート事件により1974年に大統領辞任。

- 225 中島宏「日中国交正常化の一考察・北京で見た日中国交交渉」(『愛知大学国際問題研究所紀要』愛知大学国際問題研究所、第97号、1992年9月) 3頁。
- 226 1949年に台湾に逃れた蒋介石・国民党政権の対大陸政策。国民党政権は台湾から「大陸反攻」と呼号し、中国大陸を武力で奪還する姿勢を内外に示していた。
- 227 日本と中国との戦争状態を終結させ、国交を正常化したことを発表した声明。日本側は中華人民共和国を中国の唯一の政府と承認し、中国側は日本に対する戦争賠償請求権を放棄した。
- 228 1934年5月、香川県生まれ。同じ大蔵省出身の大平に見込まれ、大平の長女・芳子と結婚。大平の内閣総理大臣政務秘書官などを務める。急死した大平に代わり、衆院旧香川2区から出馬し当選8回。2000年、第2次森内閣で運輸相兼北海道開発庁長官として初入閣。05年に政界引退。
- 229 論者による森田へのインタビューは、1回目は2022年12月10日に森田の自宅で、2回目は23年11月10日に同じく森田の自宅で行った。
- 230 2022年12月10日、論者が森田に行ったインタビューから。
- 231 前掲、2022年12月10日、論者が森田一に行ったインタビューから。
- 232 森田一『大平正芳秘書官日記』(東京堂出版、2018年4月) 2頁。
- 233 1937年1月生まれ。東京都大田区在住。田中香苗は2男2女がいた。
- 234 2023年11月10日、論者が東京・霞が関ビル内「霞会館」で平田早苗に行ったインタビューから。
- 235 前掲、森田一『大平正芳秘書官日記』9頁。
- 236 田中香苗「熟慮した言葉」(『大平正芳回想録——追想編』、大平正芳回想録刊行会、1981年6月) 331頁。
- 237 前掲、2022年12月10日、論者が森田一に行ったインタビューから。
- 238 梶田大介「財務総研スタッフ・レポート 都道府県別預貯金残高と業態別金融機関店舗数の変遷」(財務省財務総合政策研究所、2022年4月22日) 11頁。
- 239 https://www.mof.go.jp/pri/publication/research_paper_staff_report/staf24pdf
- 240 2023年11月10日、論者が森田一に行ったインタビューから。
- 241 田中角栄「わが戦後史」(『月刊現代』講談社、1994年2月号) 46頁。
- 242 佐藤昭子「田中角栄 私が最後に伝えたいこと」(『経済界』、2005年12月) 135頁。
- 243 2024年4月現在。東かがわ市立白鳥小中学校HP https://www.fureai-cloud.jp/_view/shirotori/home/index/syoukai/gaiyou
- 244 2023年11月23日、論者が六車修二に行った電話インタビューから。
- 245 大平正芳『私の履歴書』(日本経済新聞社、1978年7月) 9-10頁。
- 246 田中香苗「自伝(1) 私の歩んだみち」(前掲、『回顧 田中香苗』) 40頁。
- 247 前掲、田中香苗「自伝(1) 私の歩んだみち」(前掲、『回顧 田中香苗』) 58頁。
- 248 前掲、2023年11月10日、論者が平田早苗に行ったインタビューから。毎日新聞社が1964年、政界、経済界、学界などの協力を得て設立した。中国をはじめアジア諸国の調査研究、関係当局への建議を行っ

ている。

249 2022年5月18日、論者が東京都世田谷区内で海藤ユキ子に行ったインタビューから。

250 前掲、2022年12月10日、論者が森田一に行ったインタビューから。

251 1889-1974年、香川県生まれ。日本の政治学者。東京帝国大学、東京大学名誉教授などの総長を務めた。

252 前掲、宮森喜久二「評伝」(『回顧 田中香苗』)98頁。